豊かな農村と ビックマンマの願い

北海道女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク）
事務局長　片　山　寿美子

◆はじめに

この夏、太平洋地域、中央アジア地域、南アジア地域、アフリカ地域など途上国からのＪＩＣＡが受け入れた研修員たちに、農村地域振興にかかる女性の役割や農村女性の自立に伴う起業活動の現状について話す機会が何度かありました。

その研修員たちは、政府やその地域の農業関係の役職者でいわばエリート官僚でした。

研修の目的は、それぞれの国における農業・農村地域の発展に関わる女性の役割発揮や男女共同参加画などへの支援と仕組みづくりの手法を探すといったことが主体でした。

研修の中では、それぞれの国における農業事情や女性の役割発揮の現状、起業化活動の状況などが披瀝されました。

お金もない、食料も十分ではない、また男性中心社会なので、多くの女性は今ある現状をあるがままに受け入れて、そのことに疑問など抱かない、起業化活動などしようと思っても、売りに行くには何キロも徒歩や自転車で行かねばならず思うに任せない、などなどそれぞれの現実的なお国事情が浮き上がってくる中で、何がこの人たちに役立つのかとはじめは気が重くなりました。

かつて北海道の農村地域の女性たちも同じような環境から今日に至っているのだからと思いなおし、明るく豊かに、たくましく築いてきた農業と農家生活の道のりについて、

片山 寿美子（かたやま　すみこ）氏

昭和39年4月、北海道に入庁

生活改良普及員として農家の生活指導に従事。その後、北海道総括専門技術員として生活経営の専門家として生活改善全般および農林女性の自立に向けた企業化活動の強化等の生活改善分野で活躍。

定年退職後、北海道農業担い手育成センター（現（財）北海道農業開発公社担い手支援部）の就農コーディネーターを歴任。

現在、ボランティア活動の一環として、北の恵み愛食フェア実行連絡会事務局次長、北海道マリッジカウンセリングセンター相談役、全国女性・生活支援協会交流サポーター等に就任。

平成20年に北海道知事から「北海道らしい食づくり伝承名人」の認定を受け、多方面で積極的な活動を展開している。

農村女性の視点から情報提供することにしました。

講義もさることながら、マンマのメンバーたちにも手伝ってもらい、農村女性による起業活動の経過と地域活性化のつながりについてマンマ達の生の言葉で活動内容を紹介してもらいました。

研修員たちは、軌道に乗りきった女性起業の状況や元気いっぱいの農村女性の姿を目の当たりにした結果、すばらしいと感嘆し、帰国後のモデルにしたいと積極的な意欲を示したものの、帰国後の活動を具体的に描く。アクションプランの検討の際には、資金力、情報力、技術力、地域力、などなど、お国の状況を考えると実際的な道のりは極めて険しそうでした。

モノ、ヒト、金、などの不十分さばかりに気を取られるのではなく、今自分が望んだ夢を手に入れるには、現実に負けない勇気とたくましさが大切だと研修員たちに話しながら、北海道における農家生活改善活動の経過を改めてふりかえりマンマ達の活動を再確認しました。

◆豊かになった農業の光と影

北海道の農村でも、かつては、開発途上国と同じような状況現状にありましたが、戦後の復興とともに生産のみならず生活改善も進められまさに光り輝く豊かな農業と農村が確立され、今日を迎えたと言ってよいでしょう。

しかし、つい最近まで、貧

ビックマンマ小栗美恵さんと花茶にて

しさから脱出するには、生産基盤の確立が最優先で家庭生活は、ひまも、金も余裕もなく、とにかく労働を支えるしのぎの場として、贅沢は禁物、稼ぐに追いつく貧乏なし、女は黙って稼ぐという風潮が染みわたっておりました。そのことは農村女性から主体性を奪い、従属的な労働を強いるというまさに罪深い歳月がながいあいだ繰り返されていたのです。

結果として、農家の母たちは、こんな苦労を娘にはさせたくないと、娘を農家に嫁がせるのを拒み続けるという状況を生み出しました。

物言えぬ母、物言わぬ母を見てきた子供たちは農業に幻滅し農村から遠ざかってゆくこととなり、とりわけ、農村から若い女性が姿を消し、後継ぎとなった息子の配偶者探しに苦慮するなど、大きなツケを払い続けることに繋がりました。

豊さの陰に潜む悩ましい現実は、農村の女性たちに、このままで良いのかと、生き方をチェンジさせる思行力（思い行動する実践力）を培うキッカケとなりました。目的を共有する仲間とともにグループ活動で学び、視野を広げ、現状改善にめざめた女性たちは、金がないなら稼ぎ出そう！暇がないなら創りだそう！と前向きに自らの視点を変え、まず身近にある野菜を直売するなどの起業化活動を興し、そこから経済的な手がかりをつかみ、農業経営のパートナーとしての居場所を

確保し、途上国の研修員たちから「ビックマンマ」と言わしめる元気さを手にしました。この陰には普及活動とりわけ生活改善活動をけん引した生活改良普及員の存在とその働きが極めて大きかったと当事者であった一人として自賛したいと思います。

◆ 生活改良普及員のなせるわざ

農家生活の中で、もやもやとした不安を感じた女性たちが、普及員に相談し、漠然とした問題を課題として再認識し、課題解決の計画を検討し、試行実践し、その活動の結果を確かめ、次へステップアップさせるといったプロジェクト的な活動を生活改良普及員の支援をもとに、学び、実践力を磨いてきました。そのことが、問題意識を持ち、行動力のあるパワフルな女性の誕生に繋がったと思っています。

農村の元気な女性たちは、短時間で誕生したものではなく、三年、五年、十年といった長い時間をかけて学び、自分たちの意思で自己実現の道を開いてきたと言えるでしょう。

このような活動を陰ながら支えてきた生活改良普及員は、女性の悩める思いを汲み、思いをかたちに変えるために学習活動仕組むなど、さまざまな形で農村女性を支援し、力づけ、農村の元気づくりを具体化させてきました。

主体的に考え、行動できる女性たちの存在は、魅力ある農家生活と地域づくりへ大きく貢献し、農業経営面にも、新しい風を送ったのです。

これらは、普及員の献身的な活動のなせるわざであり、ビックマンマとかスーパーマンマ誕生の重要な要素だったのです。

◆ ビックマンマの泣き所

ビックマンマ達は、自分の居場所は、我が家の農業経営主体であると、自分のゆく道をしっかり定め、その生き方を決めています。

かつてのように否応なく決められた道をとぼとぼ歩くのではなく どんな選択であれ、自分が選んだ道だから後悔もしないし、泣き言をいわない強さとなっています。

これらは、マンマ達との会話や、行動を見たりしているとそのたくましさが生きざまとして伝わって来るのです。

例えば、昨年、健康を害し、入院加療を余儀なくされたあるマンマは、離農を覚悟したものの、退院後荒れた圃場や経営状況を見るや、この儘で死ぬわけにはいかないと奮起しシーズン後半にも関わらず、経営内容をミニトマトの生産に集中させ経営の立て直しに努力し、何とか急場をしのぎました。どうしているかと心配する私に向かって「死ぬ気でやれば、できるのサ！」と豪語し今年も元気に頑張っています。

また、冷凍総菜類などの加工販売を手掛けているマンマは、夫が冗談に「俺は将来お前のヒモになるのが夢だ」と

デスカッション前のマンマ達

いうのに対し、即座に、「私の夢は、アンタを捨てることだよ」と切り返すなど、変な揶揄など夫といえども通用させないのです。

こんな強いマンマたちも、「私たちは強くなったとか元気すぎるとか、我儘になったって言われるけど、こうするにはワケがあるんだよ」。「そうサ、私たち一代のことならなんとでも我慢するし、して見せるサ、でもね、こんなこと次の世代に代送りできないから今頑張るんだよ！…」勇気を振り絞って頑張ってきたマンマの本音の言葉は半端でないパンチ力でハートに響きます。

スーパーマンマとかビックマンマとか言われている女性たちにとっても究極の願いは家族の幸せなのです。

家族が幸せになれる家庭が大切、その家庭を支える経済が重要、家族が幸せになれない経営はなにより悲しい…。これがマンマの泣き所。

子供や孫たちが農業で健やかに生きられる夢を描きつつ、今日もマンマ達は、それぞれの農場でなんやかんやとせめぎ合いながら頑張っているのです。

そんなマンマ達に。及ばずながらエールを送り続けたいと私も老体に鞭打っています。